

澤に御越之時、泉野寺町にて寺地拜領之處、瑞龍公御逝去後高岡より遅く罷越候に付上り地に相成。依之卯辰山子地に罷在候處、微妙公に申上、寺屋敷九百歩拜領被仰付とあり。按ずるに、龜尾記に、本光寺中古所々に移すといへども、高岡本光寺に限り誕生院と號す。餘は皆本光寺と號すと云ふ。さて貞享二年の由來書に、微妙院様に申上候處に被聞召上、則當居屋敷九百歩拜領仕、御老中奥村河内、長九郎左衛門、前田出雲、并御屋鋪裁許宮崎太左衛門、熊谷又右衛門連判之折紙共所持仕候。と記載有之。判書寫如左。

然者本光寺内々屋敷之儀、御談合如何相極申哉、しかと覺不申候條、様子承度旨、津田殿私方より御尋申様にと被申候。小立野之屋敷地子高く御座候之條、本光寺斷之ごとく、唯今之居屋敷小立野拜領屋敷之步數程被下、居なりに被罷在候様に御相談御尤之由、津田殿被申候。私も内々様子よく存候故、具に玄蕃殿へ申入候。何方にて被下候も同事に御座候條、とかく居なりに被罷在候様に御相談可然由被申候。彌々玄蕃殿へ御狀被遣、返事御取被成、其上

にて御極御尤に奉存候。猶追而可申上候。恐惶謹言。

閏十月廿八日

奥村玄蕃

河内守様 御中

尚々以、其元慈雲寺別條無御座候哉、承度存候。以上。拙子儀、比小松相詰罷在候。然ば貴様御屋敷之儀、内々御訴訟通可成申御座候條、先以珍重存候。委細河内方迄申遣候條、彌御相談可被成候。頓而罷歸可御意候。恐惶謹言。

閏十月廿八日

奥村玄蕃榮 判

本光寺御同宿中

本光寺最前於小立野被下候寺屋敷被召上候條、右之步數を以、卯辰今迄之地子屋敷之内居成被下候。則屋敷御奉行其段申渡候間、右之通本光寺へ可被申達候。

十二月四日

奥村河内守 判
長九郎左衛門 判
前田出雲守 判

岡嶋市郎兵衛殿

葛菴藏人殿 人々中

先日之御折紙奉存候。仍御屋敷之儀、昨日御寄合所にて御相談候而、九百歩可相渡旨被仰渡候。左様に御心得可被成候。御左右次第近日罷出相渡可申候。猶以資面可申上候。恐惶謹言。

四月廿三日

熊谷久右衛門 判
宮崎太左衛門 判

本光寺御同宿中

按ずるに、右書簡共は慶安三年庚寅也。此の年の十月は閏なり。本光寺の寺地は、瑞龍公金澤入城の頃、於泉野寺町一拜領被仰付。と由來書にあり。此の地は元祿九年地子肝煎裁許附に、泉野本光寺上地町と載せたる地也。其の後於小立野寺地賜はり、後卯辰地子地に寺地を請け、慶安三年に拜領地に被命たるもの也。

○開山日隆上人傳

本化別頭佛祖統紀に云ふ。京兆本能寺開山日隆上人傳。師諱日隆、初諱自立。字深圓、號精進院。呼桂林房。越之中州人。桃井氏左馬頭尙儀之子。師之叔父有日存、日純、共龍華霽公門人也。師羨之。遂出家獄仕于霽公。呼桂林房。

不幸登羅霽公之喪。時師二十二歲、存純誤走本迹勝劣之異路。築妙蓮寺而居。師亦隨之。於後存純者識其逆路。造告文謝罪於月明僧正。師獨不移。執勢確如、終構別慮。今之本能寺是也。又築攝之尼崎本興寺。而弘通接度矣。時有本果院日朝。甲州立正寺。駿州光長寺兩山主也。上都謁師。朝素挾勝劣之見。師竭懷傾胸。終日不違。兩人丕喜和者亦夥。一時呼西隆東朝也。月明僧正聞之。大愕召至。之。師不屈及議論。累日不眠。工夫千般。一時開悟獨醒。待旦疾走謝罪。僧正不肯。尙促舊執。於是師造告文講信。其文曰。敬白起證文。劣弟誤生邪見。爲逆路伽耶陀。後悔千萬。今依師策捨邪歸正。再浴先師真正之慈澤。重複違背此旨。現世蒙法華經中三寶地涌大士十羅刹女三十番神日本國中大小神祇冥罰。後生墮在無間奈落者也。仍誓狀如件。應永二十五年三月二十八日。桂林房日隆花押。

今語釋中現存。多依之僧正容之。本果朝者逃歸本國。附晦岡宮。彌構確執。結黨取柄。是以岡宮迄今不捐異端。惜乎。朝亦是時在洛。共師踏善奧園。休息之黨者細知其非。親炙身延。龍華月明僧正傳。所謂河帶山勵者。是時之事也。寬